

『エヴァンゲリオン』の文化分析

檜村 愛子

Abstract

EVANGELION, that is a popular japanese animation (1995–1996), has provoked many arguments in Japan. Because this animation expresses the space and the mentality of OTAKU. Many arguments has critiqued the closeness of their space and mentality. But I show that their symptom has a universal character in the contemporary society.

本稿は、若者たちに絶大な人気を得、社会現象にまでなったアニメーション『エヴァンゲリオン』を取りあげ、この作品構造から読みとれる、現代社会における社会と主体の関係と、そこにおける主体の困難を分析する。また、『エヴァンゲリオン』は一部のアニメファンのみによって支持されたのではなく、多くの特に若者の視聴者を得たこと、またエヴァンゲリオン現象について、多くの社会的言説が生み出されたことから、アニメーションの視聴者とされる「おたく」たちおよびより広範な範囲の若者たち、に対する社会の視線も同時に構造的に分析する。

1. エヴァンゲリオン

まず、『エヴァンゲリオン』の基本的な内容を確認しておこう。このアニメーションは、95年10月から96年3月までテレビ東京系で毎週水曜日の夜6時半から7時に放映されたもので、全26話のテレビシリーズであり、後に映画化されることとなる。企画・原作・アニメーション制作は、製作会社 GAINAX が行い、庵野秀明が監督を担当したため、アニメの中でも作家性の強いものとなっている¹⁾。

物語の舞台は、2015年富士山麓の第三東京市で、2000年に「セカンド・インパクト」と呼

ばれる大破局が起こり、人類は人口の半数を失っている。その第三東京市に、「使徒（天使）」と呼ばれる謎の敵が到来し、断続的に攻撃を仕掛けてくる。「使徒」は巨大生物のこともあれば、浮遊する巨大ピラミッドだったり、コンピュータ・ウィルスだったり、その正体も意図も全く不明である。そしてその攻撃に対抗できるのは、巨人型生体兵器「エヴァンゲリオン」（通称エヴァ）のみである。

エヴァは三体あり、それぞれに14歳の少年である碇シンジと少女である綾波レイ、惣流アスカ・ラングレーが専属操縦士として選ばれている。シンジは、使徒と闘う特別組織ネルフの司令官、碇ゲンドウを父とし、父に捨てられ父を憎みながらも、エヴァ操縦士として招来を受け、父に会いたくてやってくる。アスカは、父に捨てられた母に母子心中させられそうになり、その後母は首吊り自殺し、新しい母からも疎外されるというトラウマをもつ。レイはクローン人間であることが後に明らかとなる。シンジとアスカを保護している葛木ミサトは、ネルフの軍事作戦のチーフでもあるが、セカンド・インパクトのとき親を亡くし、そのためセカンド・インパクトの原因とされた使徒の撲滅のみを人生の目的とする。また、もともと暗さをもち、シンジの母である妻ユイを突然無くしてからより深い心の闇をもつゲンドウなど、登場人物は、皆何らかの心の傷や闇を背負っている。物語は、エヴァと使徒の闘いを中心に進行するが、一方でそれぞれの人々の心の傷や内面が物語の中で語られる構成をもっている。

エヴァンゲリオンは、アニメーションらしく、美少女もの、巨大ロボットといった対象を作品中で取りあげ、また学園コミックなど様々なジャンルを駆使したことや、物語の謎とその型破り性が話題になったと共に、テレビ版での最後の二話が、これまでの物語性を解体させた自己啓発セミナー風の終結になったことで、議論をかもした。

2. エヴァを巡る言説

ここで、エヴァを巡る社会的言説—社会的反応について見ておこう²⁾。非常におおざっぱな分類をするならば、それは、「エヴァ批判」と「エヴァ評価」の二つに分けられ、多くの批判と評価の内実は、エヴァに見られるオタク的自閉性を批判するか評価するかにはほぼ収束していると思われる。

前者の批判側は、いわば「他者」であるオタクを、「社会適応不能者—自閉者」として批判するものであり、後者の評価側は、オタクのいる場所は、彼らにとって自由選択されたものではなく、余儀なく置かれている周辺の場所であることを指摘し、そこにおける独自の表象様式を認め、高みから批判するべきではないとするものである。しかし、後者の議論においても、論者たちにとってオタクは結局「他者」であり続け、後者の議論は、前者の批判に対する批判論理としてしか機能しておらず、オタクの場所のもつ意味を、私たちの社会の問題

として捉える視点は弱い。

そこで、私は、特に、批判論理に終わっている後者の議論を補足し乗り越え、前者の議論が示唆するオタクの自閉性のもつ問題も含めた社会分析を行いたいと思う。

が、ここで、それぞれの言説の具体的な中身をもう少し紹介しておこう。

まず、前者の議論である。特に、最終二話が、現実とは切り離された自己実現として終了してしまう点を、大塚英志³⁾は「自己啓発セミナー的だ」と批判し、宮崎哲弥⁴⁾は、「表現個人主義の限界」として共同体の危機を読んだ。また、上野俊哉⁵⁾は、この作品が閉じた箱庭的世界観を反復し、「自閉的な世界に逃げ込むだけの解釈の袋小路に向かっている」とし、日本が排除している、移民他の世界的現実は全く言及されていないとする。

これに対し、この作品を症候的に読むものを見ていこう。香山リカ⁶⁾は、「使徒から地球を守るという大きな使命を担った特務機関ネルフの人たちが、そろいもそろってこうしてファミリーロマンスに巻き込まれてしまうのはどうしてなのだろう」と問いつつも、「地球を救う戦士たちが、大義名分でも『人類の平和のために闘うぞ』とはいえず、ファミリーロマンスの中でしか生きられないということが、この作品の最大の衝撃であり魅力だろう」と指摘しこの作品を否定はしない。また岡真理⁷⁾は、「自らが生き延びるために友人を傷つけ、自らが生き延びるために逡巡の果てに唯一の親友(カヲル)を殺した十四歳の少年が、人間が生きるということの、生き延びるということの暴力性を知っている彼が、それでもなお、類的存在として安らぐということを拒否して、この暴力のただ中へ、共約不能他者との関係性の中へ、個的存在として回帰してくることを、人間の運命として選ぶ、それはなぜなのか」と共感的理解を伴いながら問い、「その答はテキストの内部にはない」としている。また、澤野雅樹⁸⁾は、「エヴァの最後の二話を自己啓発セミナーとって悦に入る人々は、マイノリティになったこともない人格者たちである」とし、自らの左利きの経験から、「社会の記憶術が右手に刻印されているとき、適応とは制圧である」とする。そして「巨大な敵と対峙する恐怖をエヴァほど生々しく描きえた作品はなかった」とし、「シンジが『逃げちゃダメだ』とくり返すのは、使徒が恐ろしいからだけでなく、使徒から逃げることで、誰からも愛されなくなることが恐ろしいからである」と述べている。また、東浩紀⁹⁾は、「エヴァの魅力は物語自体にあるのではなく、このような物語がアニメーションを媒体にして登場したということの意味を考えなくてはならない」とする。「庵野監督は、美少女を書けば必ず売れるといったアニメの期待の類型化に則りながら名をなしてきたのであり、そういったアニメ業界への危機感を持ち、アニメファンへの失望をもっていた」とする。前作『ナディア』のあと、庵野は、「四年間壊れたまま何もできなかった」「ただ死んでいないだけだった」のであり、エヴァについては、「閉塞感を何とか打破したかった」「おれは、アニメオタク、アニメファンが観たいものを作ったんじゃない、観なければならないものを作ったんだ。」という。

3. エヴァの物語

(1) エヴァが投げかけているもの

前節で、エヴァ批判に立つものは、いわば健常者の側から、適応障害であるオタクの自閉性を外から攻撃しているに過ぎないこと、エヴァ擁護に立つものは、オタクの存在を前提に、彼らの生きがたさを考察することが必要であるとしていることを示唆した。が、後者が批判論理と「他者」の物語で終わらないためには、先述したようにこの物語がもつ存在論的普遍性を構造的に取り出す必要である。

エヴァの物語は、オタクに見られるような、自己評価が低く自分の存在を肯定できないあの人々の物語である。が、もともとオタクの存在自体、社会的審級が社会の中で解体していくと共に生まれたものであり、それは最初から現代社会の問題を伴っている。エヴァが広範囲の視聴者を獲得したのは、オタクの問題が抱えている、現代社会に見られる特質の普遍性ゆえである。この点を見ていこう。

まず第一に、社会的審級の不在は、自我理想の存立を危うくする。それは、生きることの無意味さが意味論の水準で語られるニヒリズムの時代よりもっと重篤な事態であり、他者との関わり、他者の承認という幼少時に達成されているはずの原初的問題の前面化となり、主体を支えるはずの他者の忌避を生む。

第二に、自我理想の存立の危うさは攻撃性の組織化の困難を生む。ニヒリズムは批判論理として批判の対象への攻撃性を組織可能だが、オタクたちには攻撃性-能動性はそれ自体外傷的なものとなる。

こうして、自我理想の不在は、他者の忌避と能動性の忌避を導くが、これは、オタクだけの問題ではないだろう。エヴァは、この両者の困難をもつシンジに、他者との直面と攻撃性の発動という外傷的行為を引き受けさせることとなる。もし、これが単に不適應者の社会適應の物語なら、それは、シンジにだけ見えていたこの行為の外傷性が主体的に克服された物語として終わることとなる。しかし、この物語が大衆的に受け入れられたのは、この外傷性が、単に一部の主体の不適應障害ではなく、社会的症候であることが見取られているからでもある。そして、この行為がもつ本質的な外傷性は、単に克服されない幼児期への問題の退行を意味するのではなく、これまでの主体と社会が自明なものとして対象化することそのものを抑圧・忘却してきたものである上で現代的な意味をもっているだろう。

(2) シンジの困難

ここで、シンジに現れている、生の困難を、物語から分析してみよう。

シンジは、自己評価がひどく低く、自分を好きになれない。それゆえ、人から評価されることに期待をもてず、人から嫌われた経験の方が多い。エヴァに乗る前は、何もない人生で

あり、自分のことを「存在してもしてなくてもどうでもいい」と思っていた。彼がエヴァに乗るきっかけが父親にあること自体、香山リカのいうようにひどく幼い理由のようだが、それは、家族コンプレックスが別の社会的物語へと昇華されていくための社会的審級がない現在の問題でもある。

シンジがエヴァに乗る理由は、ひどく後ろ向きである。彼は、目的をもたず、自分の力を発揮するために必要な自我理想を構成していないために、攻撃性を自分のものとして発動することができない。彼がエヴァに乗らなければいけないというのは、ひどく外傷的なことであり、実際、彼にとってそれは苦痛でしかないばかりか、岡¹⁰⁾の指摘するように、それは彼にとって暴力の場であり外傷を連続して受けることとなる。彼がエヴァに乗るのは、同じように、他者との関係をもてない、レイにある種の想像的同一化をするからである。岡は、「テクストの中に何も答はない」とするが、それは、岡の立てている暴力についての問いが、健常者にとっての問いの水準にあるためであり、オタク的主体にとっての物語的論理はきちんと構成されている。

シンジはこのような外傷的場を不本意に受け入れることとなるが、それは彼が他者に承認されるアンビヴァレントな場所ともなる。実際、澤野が指摘するように、他者からの承認と社会化、澤野のいう記憶術の内化とは、他者からの承認という快楽であると同時に主体にとっての外傷でもある。人はこれを外傷でないシミュラクルとして飼い慣らすことで、その外傷性を忘却しているだけである。それゆえ、エヴァの闘いとは、劣った者たちの退行的闘いではなく、むしろ、私たち健常者が忘却している原初的闘いでもある。この点にエヴァの現代的意味が存在する。

(3) シンジの精神分析的過程

外傷の場でしかないエヴァ体験が、物語の進行の中でどのように変容していくだろうか。

エヴァに乗ることは苦痛でしかなく、シンジに何の内的意志がないにも関わらず、エヴァに乗ることは、人々の評価を得ることであるため、シンジはエヴァに乗り続けることとなる。人々の評価や賞賛を得たことがなく、自分の価値を認められないシンジにとって、エヴァに乗ることは、成功体験を得ることとなる。

しかし、敵一使徒は非常に狡猾であり、常に新しく形態を変えて進化しながら、思いも寄らぬ方法で、襲ってくる。現代文化における敵の表象が、「内的な他者」を指すものとなり、善悪二元論のようなわかりやすい図式でなくなってきた、自他融合的な様相をもっていることは、映画『エイリアン』や、漫画・アニメ『ドラゴンボール』などですでに見られることである。使徒は、死の欲動ともいえるべきものであり、シンジの自我境界をくり返し襲う。

彼の攻撃性は、むしろ彼が記憶や自我を失って、攻撃が暴走するようにして発揮される。ゼーレが狙い求めたのは、この人格化されない暴走する攻撃性であり、それこそが個的存在

である人間を破壊するものだろう。死の欲動が反復強迫として現れているものである。

シンジにおいては、もともと自我が弱体だからこそ、攻撃性が暴発し、また、エヴァは人々の評価を経て偽の自我=仮の自我と機能しているからこそ、使徒の自我攻撃が完全な解体とはならない。この点、エヴァのみによって完全に自我を構成してしまっているアスカが、エヴァの解体と共に自我解体を起こすのとは対照的である。

エヴァに乗るか乗らないかを留保しているのが、いわばオタクの空間であり、それは判断と行為の留保の空間である。だからこそ、シンジは何もしなかったのである。能動性や攻撃性を構成しないが、他者に同化もしない。とはいえ、それは批判論理のようにそれ自身が言語化され一つの場として選択されているわけではなく、単に、傷つけられねじくられてしまっているがために逃避している避難的な空間である。

(4) シンジの治癒

シンジの治癒は、カヲルによる存在の全的受容と、そのカヲルを、死の欲動の象徴として殺し、自らの攻撃性を形式化したことによる。そういった攻撃性を誘導したのは、要するに、カヲルを殺すよう支持したのはカヲルだった。これを見てみよう。

シンジがはじめて存在を肯定されたのは、アンドロイドのような存在であり結局のところ敵であった、カヲルによってであった。カヲルがシンジを認めしかも愛することができたのは、カヲル自身に生きる意志がないからであり、生と死が等価だからであり、いわば、カヲルとシンジは、想像的同一化が可能な関係だったからである¹¹⁾。シンジは生きる意志を決定的に欠いている。その覇気のなさは、アスカの攻撃や大人たちのネガティブな反応を寄せつけるだけであり、シンジが存在論的に担う真実は、健常者の側からは見えない。死に近い存在として、カヲルとシンジは、存在論的交流を行うのである。そして、カヲルの存在を通して、むしろシンジは、生を自覚していく。これは、死を経験する¹²⁾ことで生の構造を相対的に理解する精神分析的過程である。

最終二話の中身は、それだけ見れば確かにくだらない。が、最終二話の気づきを可能にし、自分を好きになれる可能性を開いたのは、実はそれ以前にあったカヲルとの出会いによるものであり、また、不器用に同じように人間化しようとするレイの存在、同じような寂しさや苦しみをもつミサトやアスカとのコミュニケーションによるものだっただろう。シンジの気づきが、最終回のあの内閉的空間のみにあると考えるのは、精神分析の知識からいってもお粗末だろう。

映画版では、カヲルの存在は消え、人類補完計画が考えるような、単一の生命体への融合の拒否として物語は終結する。拒否の対極にある、他者と分離してある個の選択を誘導するものはなんだろう。通常、他者との分離にも、移行空間のような対象関係は働き、エロスがそれを誘導する。カヲルは、まさにそのような移行対象であった。映画版では、シンジの場

合に極限的に働いた、分離を誘導するエロスのインセンティブはすでにカットされている。映画版では、進行形のテレビ版とは異なり、すでに作者にとって移行と分離が獲得されてしまったあとに作られたものであるからこそ、分離は、移行対象の忘却と共に、外傷と苦痛のただ中に生きるという意志の選択として表象されることとなる。テレビ版が確かに現実が空虚であるのに対し、映画版では、分離が確かであるだけ、苦痛は意志的に引き受けられている。

(5) 最終二話のもつオタク的論理

それゆえ、ここで最終二話については、東が指摘するような、オタクの論理の中から出て来た独自性を評価しうる、別様の解釈が存在する。

監督が、あのような場所を設定せざるを得なかったのは、エヴァやエヴァとの闘いを除いては、社会の中に、存在について問う社会的空間がなかったからである。オタクは、この空間の不在と、その空間からの逃避によって成立している。それゆえ、いかに稚拙であれ、あのような空間の設定そのものが、オタク共同体から観た場合の、一つの脱構築であるという、東¹³⁾の指摘は、考慮されるべきだろう。

特に、シンジが夢想する、明るい日常的な学園風景は、それが意志される空間として表象される場合、奇妙な人工性を漂わせていて、作品の質を落としているとはいえないところがあるように思われる。

闘いという攻撃的原初的な場所を設定しながら自らの攻撃性を飼い慣らしている空間は、まさにオタクの場所だろう。子どもの空間に実際に近いものである。そして彼らにおいては、攻撃性が組織されないがために、それは、機体のデザインやフォルムへのフェティッシュな興味へとずれていくことともなる。監督のアンチオタクの意志は、そういったオタクの倒錯¹⁴⁾に向けられたものだろう。しかし、そういった原始的な空間の中で、オタクは、自分についての考察を進めていくのである。

注

- 1) 東浩紀「庵野秀明はいかにして八十年代日本アニメを終わらせたか？」『ユリイカ』1996.8
- 2) エヴァを巡る社会的言説については、言説リストを網羅しながら、論争等をコンパクトにまとめている、五十嵐太郎編『エヴァンゲリオン快樂原則』(1997, 第三書館)が参考となる。
- 3) 大塚英志「『オウム』を越えるはずが…」『読売新聞』1996年4月1日
- 4) 宮崎哲弥「『脳内革命』『新世紀エヴァンゲリオン』ブームに警告する！」『SAPIO』1996年12月25日号
- 5) 上野俊哉「ジャパノイド・オートマトン」『ユリイカ』1996年8月号
- 6) 香山リカ「『他者の語らい』の中の人たち」『SFマガジン』1996年8月号
- 7) 岡真理「〈人類補完計画〉あるいは、行きのびるということについて」『ポップ・カルチャー・クリティーク』0. 青弓社

- 8) 澤野雅樹「左利きの小さな戦い…EVA に乗る者たち」『ユリイカ』1996年8月号
- 9) 東浩紀, 同。
- 10) 岡真理, 同。
- 11) シンジやカヲルのような生の意志の希薄な現代の子どもたちの側に立って, 問題を提示しているものとして, 宮台真司「シンクロ率の低い生」『朝日新聞』1997年2月26日の議論がある。
- 12) 東は, ここにおける死の重要性について述べている。
- 13) 東浩紀, 同。
- 14) 厳密に言えば倒錯以前であり, 子どもに見られるような多形倒錯的なものである。東も, 『動物化するポストモダン』(講談社現代新書, 2001) の中で, これを倒錯でなく欲動的(動物的)行為であるとしている。